



令和6年(2024年)3月12日

テーマ展 「^{す き せいふう}数寄と清風
^{い い なおあき ちゃ ゆ せんちゃ}ー井伊直亮の茶の湯と煎茶ー」 を開催します

このたび、みだしの展覧会を下記により開催しますのでお知らせします。つきましては、広報方についてよろしくご高配のほどお願い申し上げます。

記

1 名称

テーマ展「数寄と清風 ー井伊直亮の茶の湯と煎茶ー」

2 会期

令和6年(2024年)3月20日(水・祝)～4月22日(月) [会期中無休]

開館時間：午前8時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

3 会場

彦根城博物館 展示室1

4 展示の趣旨

彦根藩^{い い}井伊家^{なおあき}12代直亮(1794-1850)は、茶の湯や煎茶に造詣が深く、道具や茶書を精力的に収集し、茶室の造営にあたって積極的に関わっています。

茶の湯については、茶書は、自らが書写したものも含め、利休、千家、遠州、石州、^{りきゅう せん け えんしゅう せきしゅう やぶのうち}藪内と、あらゆる流派のものを揃えています。伝来する道具は収集品のほんの一部に過ぎませんが、華やかかつ洗練された道具を好む傾向にあり、綺麗さびを特徴とする遠州流の作品が一定数確認され、中国渡来の品も積極的に取り入れています。天保13年(1842)、民窯として始まった湖東焼を藩窯とし、^{こうさい めいほう}絵付師の幸齋や鳴鳳を招聘したことにより、茶道具も一層充実しました。また、彦根下屋敷の^{けやき}榎御殿内に御茶座敷を造り、江戸上屋敷や下屋敷に茶室の待合や茶屋を建てており、この際に、自ら幕府茶道にその仕様について書状で詳しく尋ね聞いていることが注目されます。

煎茶は当時、文人趣味の高揚で大いに流行しており、需要層は大名も例外ではありませんでした。天保13年(1842)、直亮は、榎御殿に中国趣味の煎茶室「楽々亭」を建立するほど熱心に取り組んでいます。茶の湯の道具同様、煎茶道具も積極的に収集し、湖東焼の道具も多く作らせました。中には、所蔵の中国渡来の煎茶碗の写しを作らせるなど、道具に

対する思いには相当なものがあつたようです。

井伊家の跡を継いだ13代直弼(1815-60)は幕末の大名茶人として良く知られていますが、彼は、直亮が築いた道具や茶書のコレクション、茶室等を受け継ぎ、これらを基盤に茶の理解を深めていったことも見逃せません。

本展は、井伊直亮の茶に焦点を当てる初めての展覧会です。大名の茶の文化受容の様相を具体的に知る機会になれば幸いです。

5 展示作品

別紙リストの39件

6 観覧料

一 般 500円 (450円)

小・中学生 250円 (170円) () 内は30名以上の団体割引料金

*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関連事業

スライドトーク (展示解説)

と き : 令和6年(2024年)3月23日(土)

午後2時～ (受付は午後1時30分～) *30分程度

と ころ : 彦根城博物館 講堂

定 員 : 50名 (当日先着順)

参加費 : 無料 *展示室の入室には、別途観覧料が必要です。

担 当 : 当館学芸員 ^{たかきふみえ} 高木文恵

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当 : 高 木 文 恵

(電話 0749-22-6100)

■ テーマ展「数寄と清風 - 井伊直亮の茶の湯と煎茶 -」 作品リスト ■

番号	名称	作者	数量	制作年代	所蔵
参考	井伊直亮画像(写真パネル)	賛:仏洲仙英筆 画:佐竹永海筆	1幅	江戸時代	清凉寺
【 直亮と茶の湯 】					
1	唐物鶴首茶入		1口	中国・宋時代	当館(井伊家伝来資料)
2	唐物森本文琳茶入		1口	中国・宋時代	当館(井伊家伝来資料)
3	古瀬戸弦付茶入		1口	桃山時代	当館(井伊家伝来資料)
4	銅鍍金花鳥獸文平水指		1口	中国・清時代	当館(井伊家伝来資料)
5	黄銅七宝花唐草文鎖		1本	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
6	六角菜籠炭斗		1口	中国・清時代	当館(井伊家伝来資料)
7	羽簾		3本	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
8	台子皆具	名越弥五郎作	一式	天保15年(1844)	当館(井伊家伝来資料)
参考	叢梨地橘紋散蒔絵台子		1基	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
参考	甌口羽釜・雁皮鍍付風炉		一式	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
9	湖東焼 赤絵金彩羅漢雲鶴文茶碗	幸斎絵付	1口	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
10	湖東焼 赤絵金彩捻文向付	弥平絵付	1口	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
11	湖東焼 赤絵金彩捻文向付	弥平絵付	1口	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
12	叢梨地山水千鳥蒔絵茶箱		1合	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
13	赤染燭台	染了入作	1基	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
14	桜花透文釣灯籠		1灯	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
15	「利休流茶湯書」	井伊直亮写	3冊	元禄3年(1690)成立 江戸時代写	当館(井伊家伝来典籍)
16	「千家伝授之書」	井伊直亮写	1冊	文政2年(1819)写	当館(井伊家伝来典籍)
17	「遠州流秘書」		1冊	文政元年(1818)写	当館(井伊家伝来典籍)
18	「怡溪註三百箇条」	井伊直亮写	3冊	万治3年(1660)成立 天保14年(1843)写	当館(井伊家伝来典籍)
19	「玩貨名物記」	井伊直亮写	1冊	万治元年(1658)序文 江戸時代写	当館(井伊家伝来典籍)
20	「名物記」		11冊	江戸時代写	当館(井伊家伝来典籍)
21	浦嶋図	元信印 近衛植家賛	1幅	室町時代	当館(井伊家伝来資料)
【 直亮と煎茶 】					
参考	煎茶室 楽々亭(写真パネル)				
22	染付唐人物花鳥捻文煎茶碗		5口	中国・清時代	当館(井伊家伝来資料)
23	湖東焼 染付唐人物花鳥捻文煎茶碗		1口	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
24	湖東焼 赤絵金彩唐人物図煎茶碗	鳴鳳絵付	5口	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
25	紫泥六角水注		1口	中国・清時代	当館(井伊家伝来資料)
26	青花花卉文百合口水注		1口	中国・明時代	当館(井伊家伝来資料)
27	唐銅饗養文鼎		1口	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
28	菟組釜敷		1枚	中国・清代	当館(井伊家伝来資料)
29	花透釜敷		2枚	中国・清代	当館(井伊家伝来資料)
30	蠟石製桃形肉池		1合	中国・清代	当館(井伊家伝来資料)
31	白島石長掛算		6本	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
32	湖東焼 赤絵金彩丸文散硯屏	鳴鳳絵付	1基	江戸時代	個人
33	青磁陽刻梅竜文透彫硯		1面	中国・清時代	当館(井伊家伝来資料)
34	石製長方硯(羅文硯)		1面	中国・清時代	当館(井伊家伝来資料)
35	唐木青貝花鳥文蒔絵懸硯箱		1合	中国・清時代	当館(井伊家伝来資料)
36	官女遊図		6曲1隻	中国・清時代	当館(井伊家伝来資料)
【 道具への思い 茶室への思い 】					
37	焼締波兎陽刻八角陶硯 銘竹生鳥箱蓋・極札とも		1面	江戸時代	当館(井伊家伝来資料)
38	宮王肩衝茶入 附属品書付	井伊直亮筆	1枚	江戸時代	当館(彦根藩井伊家文書)
39	井伊直亮書状 鈴木林碩宛	井伊直亮筆	1通	江戸時代	当館(彦根藩井伊家文書)

写真解説

*番号は作品リストの番号と一致します。

2 ^{からものもりもとぶんりんちやいれ}唐物森本文琳茶入 1口

口径2.9cm 胴最大6.3cm 高7.0cm

中国・宋時代

当館蔵（井伊家伝来資料）

^{ぶんりん}文琳は林檎の異名で、その形に似た茶入を文琳茶入といいます。^{からもの}唐物茶入の中で文琳は、茄子とともにその最上位といわれ、名物も多くあります。本作は、かつて森本某所蔵であったことからの命名と推測されます。

本茶入は、直亮が、リストの1・3の茶入とともに^{こぼり}小堀家代々所持の品として「長浜の者(町人)」から購入したことが、直亮自筆の道具帳から判明します。入手は天保13年(1842)のことで、3点とも極上々位という最高の位付けをしています。



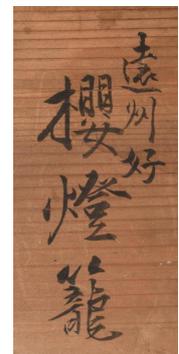
14 ^{おうかすかしもんつりどうろう}桜花透文釣灯籠 1灯

胴最大22.1cm 高42.5cm

江戸時代

当館蔵（井伊家伝来資料）

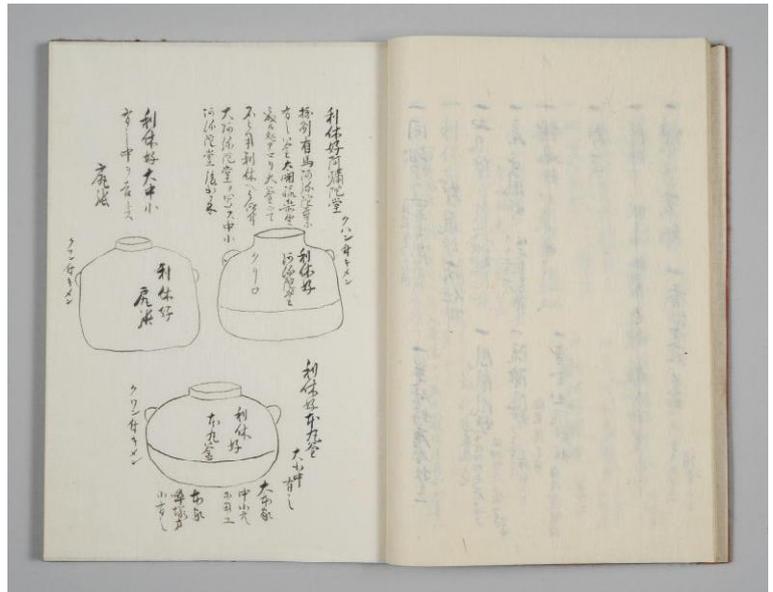
^{ろじひさし}露地や^{つる}庇などに吊す鉄製の釣灯籠。
外側は、^{きっこうつなぎ}亀甲繫と^{おうか}桜花の文様を透かし彫りで規則的に配し、内側は和紙を貼りめぐらせています。江戸時代前期の茶人、^{こぼりえんしゅう}小堀遠州(1579-1647)の好みのもと伝えられ、遠州の特色と言われる「綺麗さび」を具現化したような、優美で洗練された作品です。この灯籠を納める箱の蓋に、直亮自身が「遠州好/桜灯籠」と記しています。



(箱書)

- 16 「千家伝授之書」 1冊
井伊直亮写
縦23.7cm 横17.3cm
文政2年(1819)10月写
当館蔵 (井伊家伝来典籍)

「千家伝授之次第」と題し、表千家^{おもてせん け} 7代如心齋宗左^{じよしんさいそう さ} (1705-51)より改まったという、茶筌荘をはじめとする7段の記述から始まる千家茶道の書を直亮が書写したもの。直亮自身の奥書によれば、萩原勘解由孤雲(斑山亭)の秘書を或る人に借りて写したものといます。萩原は彦根藩士で千家流の茶人。



- 24 湖東焼 赤絵金彩唐人物図煎茶碗 5口
鳴鳳絵付
口径6.6cm 底径3.2cm 高4.1cm
江戸時代
当館蔵 (井伊家伝来資料)

湖東焼は、文政12年(1829)に彦根城下の商人によって始められたものが、天保13年(1842)、直亮によって彦根藩に召し上げられて藩窯となりました。藩窯時代、多様な作品が作り出される中で、茶道具も多く作られました。現存作品から判断すると、湖東焼では、茶の湯の道具より圧倒的に煎茶道具が多く作られていたものと判断されます。本作の絵付をした鳴鳳は、直亮の代に彦根に招聘された絵付師で、次代の井伊直弼^{い い なおすけ} (1815-60)の代も引き続き湖東焼の絵付師として活躍しました。中国趣味の画題、画面を埋め尽くす華やかな文様の本作は、直亮の好みが反映したものと考えられるものです。



25 紫泥六角水注 1口

口径5.8cm 高9.5cm

中国・清時代

当館（井伊家伝来資料）



煎茶で用いる水注。紫泥とは、黒みを帯びた赭色、または暗い紫色の無釉の陶器をいい、中国では紫砂と呼ばれ、煎茶道具で好んで用いられました。本作は、中国江蘇省の宜興窯製と考えられており、肩部上面には、中国・清時代の篆刻家・陳鴻寿(1768-1822)の彫銘が確認できます。「琉球焼茶つき(ぎ)」と書かれた箱書は直亮の筆跡と考えてよいもので、琉球産と誤認されたのは、琉球経由で輸入された可能性を示唆するのではないかと説があります。

37 焼締波兔陽刻八角陶硯 銘竹生島

箱蓋・極札とも 1面

最大幅15.9cm 高2.7cm

江戸時代

当館（井伊家伝来資料）



陶製の硯。「竹生島」の銘は、墨池の左に刻まれた兔に由来し、謡曲「竹生島」の一節「月海上に浮かんでは 兔も波を奔るか 面白の島の景色や」に拠るものです。箱の蓋には「書院硯」とあり、書院を飾る道具として用いられたものと判断されます。

本作には、天保12年(1841)に古筆の鑑定家、古筆家10代了伴(1790-1853)による極札が添います。これによると、箱書の筆者は、江戸初期の武将で茶人

でもあった佐久間将監実勝筆だといえます。井伊家伝来の茶道具の箱書の極め札は、本作のように了伴によるものが比較的多く、直亮が鑑定させた可能性が指摘できます。また、直亮の当主時代、道具本体もその筋の専門家に鑑定させている例も見られ、直亮の道具に対する並々ならぬ関心度が窺われます。